

# 英国教会と聖書に関するメモ

## (1) 聖公会の礼拝と聖書

○ 教会は聖書を離れてはその永遠の生命の源泉と存在理由を見失い、信仰者は教会生活を離れては聖書を十分に理解し、福音によってキリストの体として生かされる経験を十分に味わうことはできずとする思想が、聖公会では祈祷書によって保たれている。

「聖書の解釈は、生きた霊的社會が伝えてきた信仰と伝承と経験の中で、共同体の日々の営みに照らされながら時の徴を読み、常に霊的力によってダイナミックに聖書の言を理解し、生活を営み、今の時に神の言を伝えるものでなければならない。」(1988 年ランベス会議)

○ クランマーによる祈祷書改革 (1549) と聖書<sup>1</sup>：

- 1) 自国語による礼拝を実現したこと：1538 年、ヘンリー 8 世の側近で総司教代理のトーマス・クロムウェルが、信徒が読めるように全ての教会に聖書を設置することを指示。『大聖書』が 1539 年に出版され、各教会に置かれた。
- 2) 祈祷書に聖書の言葉をつとめてそのまま引用したこと：祈祷書の文言は、聖書からの引用が 2/3 と言われる。聖書を基準とする信仰生活が、式文を通して、これに参加するものにそれぞれの式の意味や歴史的経緯、あるいは意義が明らかにされた。これによって、暗黙の内に、礼拝参加者に聖書解釈の指針が示された。「(これは) 教会が生きた共同体として日々の礼拝の中で聖書を読み、その意味を悟り、会衆が福音によって一つの共同体として生命の糧を与えられ、強められるように願っているからに他ならない。」
- 3) 教会暦に従った聖書日課表を祈祷書に載せたこと
  - ※ 朝夕の日課で、旧約を年に 1 回、新約を 2 回、ほぼ順を追って読めるように配慮された。
  - ※ 主日の日課で、選ばれた聖書箇所から、教会暦の意義が理解できるようにされた。
  - ※ 降臨節第二主日に特祷が定められた (=日本聖公会の現行祈祷書の「聖書を読む前の祈り」)

## (2) 聖書の英語訳

ヘンリー八世の離婚問題に発する変化は、「元来、宗教的信念というよりも教会政治上の変化であったが、国内の混乱状態は未だ数的には多くはなかった真のプロテスタント派に対して好機を与えることになった。その起源を見れば、それは外来というよりは土着のものであって、元をたただせば、ルターよりもウィクリフによって示された途を辿るもの<sup>2</sup>であった。英国の宗教改革は、ロラード派に始まってピューリタンの運動を通して実を結ぶに至るまで、聖書翻訳<sup>3</sup>とその普及を運動の主軸にしていた。

1 「このような形で聖書を全ての信徒が日々親しむように具体的指針として示したのは、英国教会の極めてユニークな発想であった。」(『イングランドの宗教 - アングリカニズムの歴史とその特質』, 塚田理, 2006, p.114)

2 『キリスト教史 3 宗教改革』, W. ウォーカー, 1970, p.128

3 ウィクリフ以前、中世期の聖書の地方語への訳は、礼拝における説教に関連してなされていた。これを公式に禁じた例はほとんど見あたらない。唯一の例はイノケンティウス三世が異端運動とされたワルド一派の聖書に関するもので、特に説教の準備に使うことを固く禁じたものである。教会当局は、特定の聖書の翻訳を公認するか否か判定するにあたって、翻訳と共にそれに付

ウルガタから英語訳したジョン・ウィクリフ (c.1320-1384) も、ギリシア語<sup>4</sup>、ヘブライ語原典からの英語訳によって英国の宗教改革に決定的な寄与をすることとなったウィリアム・ティンダル (1494 - 1536) も異端として処刑されたが、聖書の訳自体についてはではなく、許可なく聖書を翻訳し、普及させようとしたこと、それを既存教会への批判・攻撃として行ったことが咎められたのである。

訳自体については、ウィクリフ訳<sup>5</sup> はローマ・カトリックの教えと全く合致していて、禁書になった後も、検閲者は見分けることができなかったという。

ティンダル訳<sup>6</sup> では、訳で問題になったのは、次の四つの語だけである。プレズビュテロスが "priest" (司祭) でなく "senior" (長老) と、エクレシアが "Church" (教会) でなく "congregation" (会衆) と、アガペが "charity" でなく "love" と、メタノエオーが "doing penance" でなく "repentance" と訳されていた。ティンダル訳や、その改訂版であるジュネーブ聖書<sup>7</sup> が、そのままの形で英国教会によって認められなかったのは、これらの語の訳と、欄外に付けられていた註で示された、そのカルヴァン主義的な職制理解、教会論が、英国の政治的文脈では反体制的意味を持ったためである。その点を除けば、訳自体に問題があったわけではなく、優れたものであった。ティンダル訳は、トーマス・マシューという偽名のもと、ジョン・ロジャースによって旧約と外典の未完部分をマイルス・カヴァーデールの訳で補われ、クランマーらの働きかけによって 1500 部の販売がヘンリー 8 世によって許可されて、1537 年に出版された。これが英国で合法的に売られた最初の英語訳聖書である。<sup>8</sup>

---

随された注釈ないしは用語解(語彙)集を参照し、あるいは訳者名を確認した上で、その是非を確定した。「ラテン語を使わない人々にとって聖書は全く理解できないものとなってしまったため、それぞれの地方の言語に翻訳する試みが各地でなされたが、その多くは聖書の一部にすぎなかった。ラテン語の力が十分でない聖職者たちが比較的容易に接することができたのは、聖書の注釈書であった。」「修道会の入門者たちは、礼拝式文に引用された聖書について学ぶことを通して、聖書の翻訳に接した。」

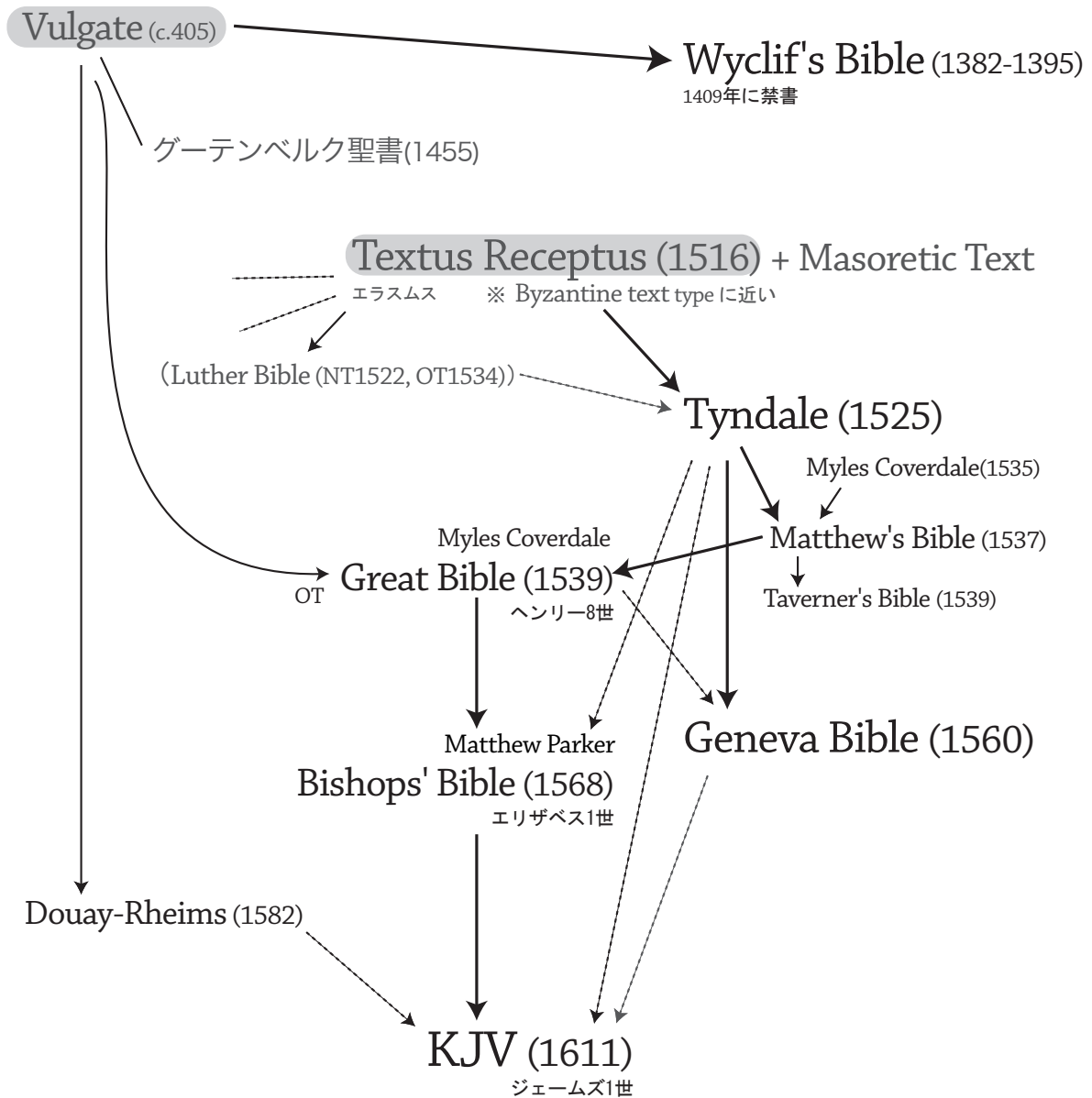
4 Textus Receptus (1516) : エラスムスが主に六つの後期ビザンチン・テキスト (12c 以降) をもとにまとめた最初の印刷されたギリシア語聖書。アレクサンドリア写本と同様なテキストが取られているところもある (マタ 10:8, ルカ 17:36, ヨハ 3:25, 使 8:37, 9:5, 15:34, 黙 22:19 など)。ルター訳、ティンダル訳をはじめ、宗教改革者による翻訳の底本に広く使われた。

5 ウィクリフ訳 : 底本は、ウルガタ。オクスフォード大学の神学者であったジョン・ウィクリフと、その指導を受けた弟子たちによって、イングランドの農民が聖書を直接に読めるようにすることを目的として、翻訳された。写本であったが、かなり普及したと言われる。1409 年に禁書にされた。ウィクリフの教えを奉ずる運動であるロラード派は、反教権的、聖書主義で、偶像破壊を主張し、千年王国説を奉じていた。この運動を抑えるためにヘンリー 4 世によって 1401 年に成立した「異端火刑法」("De heretico comburendo") は、ロラード派に限らず、聖書を所有したり翻訳したりすることを禁じ、これを違えた異端者に対して火刑に処すことを定めた。ロラード派は迫害を受けて 100 年以上地下に潜伏し、やがてイングランドの宗教改革が始まると吸収されていった。ロラード派と宗教改革派の繋がりについてはあまり明らかになっていない。

6 ティンダル訳 (1525) : 底本は、新約は Textus Receptus、旧訳はマソラ。英国商人の援助を受けて、1524-25 年に William Tyndale がドイツのヴィッテンベルク等で新約を翻訳。1526 年に Worms, Antwerp 等で印刷され、英国、スコットランドに密輸入。同 10 月には Tunstall 主教によって咎められ、公共の場で燃やされた。ティンダルは 1529 年に異端と宣告された。1535 年にアントワープで捕縛され、1536 年に異端として死刑を宣告された (トーマス・クロムウェルが助命を嘆願している)。最初の印刷された英語訳聖書であり、最初のギリシア語、ヘブライ語原典からの訳であった。翻訳にあたっては、ウルガタからの重訳であるウィクリフ聖書から意識的に距離が取られたようである。優れた訳であったためにその後の英語訳の基礎になった。ティンダルが処刑 (1536) されたために、旧訳の翻訳は完成しなかった。

7 ジュネーブ聖書 (1560) : Textus Receptus およびマソラに戻って、ティンダル訳を改訂したもの。新約聖書の節分けは、この聖書によって確定された。翻訳自体は優れたものであったが、ティンダル聖書と同様、ジュネーブ聖書にも欄外に付けられた注釈が、教会論、職制理解において国教会に受け入れられるものではなかったため、エリザベス女王は、Great Bible とジュネーブ聖書にかわるような英語訳聖書の改訂を命じて Bishops' Bible ができた。しかし、それは普及せず、ジュネーブ聖書が広く読まれ続けた (17 世紀半ばまでオランダで印刷して輸入されていた)。

8 マシュー訳 (1537) : マナセの祈りは、ジョン・ロジャースがフランス語訳から重訳した。カヴァーデールは、主に、ドイツ語訳、ラテン語訳から重訳した。従来、カヴァーデールとティンダルがライバルであったかのような見方が流布していたが、二人は互いを知っており、1529 年にはハンブルグでモーセ五書の翻訳の作業を共同で行っていたことが分かっている。ジョン・ロジャースは、1555 年に処刑された。



1534年、カンタベリー聖職会議が聖書全巻の英訳を求める誓願を国王に提出。  
 1537年、クランマーの促しにより、マシュー聖書の販売が許可される。  
 1538年、各教会に聖書を信徒が読めるように備えつけるよう指示が出される。  
 1541年、勅令で聖書を備え付けることが命じられ、違反に罰金が科せられるように。

この「マシュー」訳をベースに、トーマス・クロムウェルに雇われたカヴァーデールが『大聖書』(1539)の監修を行った。それが改訂されて『主教聖書 (Bishops' Bible)』<sup>9</sup>に、さらに『欽定訳 (KJV)』<sup>10</sup>になるわけで、いわばマシュー訳はティンダル訳と欽定訳を繋ぐリンクとしての役割を担ったことになる。

9 『主教聖書』(1568):1560年にジュネーブ聖書が出版されて広く読まれるようになったことで、『大聖書』の欠陥が露わになったために、その改訂版として出された。ジュネーブ聖書を除き、従来の英語訳は全て個人訳であって、欄外に付けられた註で示される解釈は、しばしば個人的な主張の域にあるものであった。そこで、主教たちの監督のもと、『大聖書』をベースに、論争を引き起こすような、特定の神学的立場からの註を入れられないものを、ということ出版された。改訂が重ねられて19版まで出たが、ジュネーブ聖書には遠く及ばなかった。作業にあたったメンバーでヘブライ語が分かる者はいなかったため、旧約はラテン語訳が参照されたという。

10 『欽定訳 (KJV)』(1611):底本は、新約は Textus Receptus、旧約はマソラ、外典は七〇人訳、第二エズラはウルガタ。それまでの全ての英語訳聖書が参考にされた。KJVの新約の83%、旧約の76%がティンダル訳から取られ、その約3分の1は逐語的にティンダル訳と同一であるとされる。ピューリタンによる翻訳改訂の要求を受けて、英国教会の教会論、職制論に合致し(ジェームズ1世)、欄外に注釈を入れないように(ロンドン主教)、といった条件のもと、47人の学者によって作られた(全員が聖公会、内一人が信徒)。やがて英語訳のスタンダードとなっていったが、学者が用いるようになったのは18世紀になってからのことである。